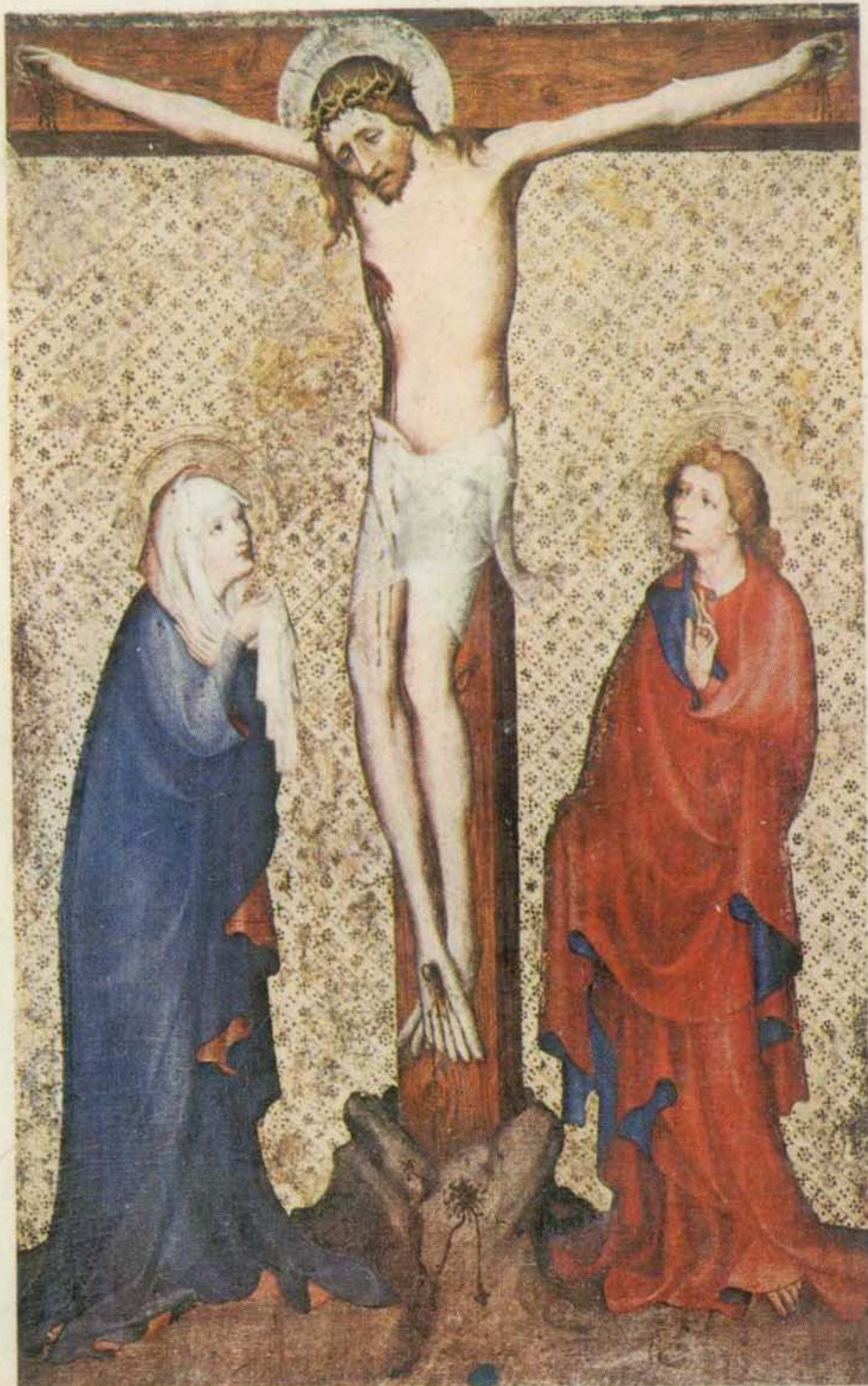


わが子キリスト

武田泰淳



講談社文庫
講談社文庫

わが子キリスト

武田泰淳

昭和46年11月15日第1刷発行

昭和50年10月25日第5刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 3930

製 版 株式会社まゆら美研

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社国宝社

© Taijun Takeda 1971

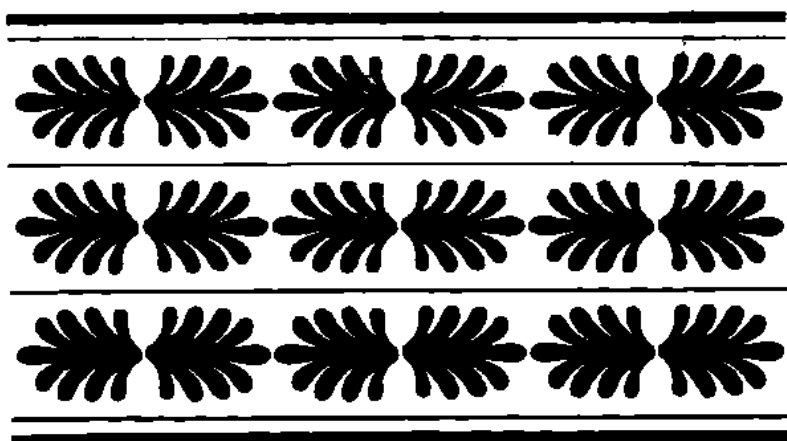
Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

わが子キリスト

武田泰淳



講談社

目次

わが子キリスト

五

王者と異族の美姫たち

一〇九

揚州の老虎

一六九

武田泰淳の文学

柄谷行人 一九三

年譜

二〇九

講談こうだん

碑いし
夜ふみ
十やじ
郎ゅうろう

(下)

あの最期の場所に向って、よろめきながら歩きつづけているとき、たしかに一度だけ、あの男の眼とおれの眼は、おたがいに見つめあったと思う。

息もたえだえによろめいていたのは、あの男の方であり、おれの方は、むらがるユダヤ人たちの臭氣にむせながら、しっかりと二本の足で立っていたのだが、おれのその二本の足は、石だたみの路面をしっかりと踏みつけながらも、あの男の両脚、いや全身のよろめきにつれて、よろめいていたと言ってもよからう。

ローマ製の甲冑に身をかためて、かつては様々の土地、様々の部落の男たちの血を吸った傲慢の刀を腰にさげ、貧しい見物人どもにくらべ、はるかに長身のおれの胸中など、誰ひとりとして察せられるはずはなかった。征服されて、反抗のあてどもない、ユダヤの連中は、もともと我らローマの兵士をおそれていたし、それに、今や疲れきった一人のユダヤ青年が、重大犯人としてイバラの冠を頭にかぶせられ、処刑の丘に向って歩かせられている、しかもそれをたつぷりと眺めることができるという喜びで湧きたっていて、奴らの視線はたった一人、このユダヤの王と自

称する奇怪きわまる男の瘦せおとろえている身体にあつまっていたのだから、なおさらそうなっていたのだ。

もしもおれに、その気が少しでもあったなら、おれは死を前にしたあの男に、こう叫んでやってもよかったのだ。

「えらそうな顔をするな。お前は、このおれの子供なんだ。神の子なんかじゃ、ありやしない。おれだけは、お前の出産の秘密を知ってるんだ。だって、おれはお前の父親、まごうかたなき生みの親なんだからな」

あるいは、能なしで気持ちがいじみた奴ら、お前の死を祭りの一種として歓喜している住民どもにはききとられぬようにして、お前の耳のそばに、おれの口をよせて、こうささやいてやってもよかったのだ。

「お前の秘密をばらそうなんて、おれは考えていやしない。そんなことをすれば、おれ自身だって、お前の二の舞いをふむことになるからな。兵士としては年老いすぎたおれは、やっかいごとに巻きこまれたくはないのだからな。だがお前さんは、今や、神（どんなカミだか、わかるはずもないし、わかったところで疑わしい奴隷の神であるにちがいないんだが）のつかわした予言者として殉教しようとしていなさるんだからな。だから、その死ぬまぎわに、ひとことだけほんとうの言葉をお前さんから、きき出したいんだよ。お前の母、あの貧乏も貧乏、無知も無知で、どうしようもないあのマリアとかいう女は、お前の真の父親について、何か一つでもほんとうの

ことを話したことがあるのかね。ない？ 一度もなかったんだって？ そうだろう。そうにちがいない。そんなことを、今さらお前に話したって、どうなるものでもあるまいからな。だけど、事實はあくまで事実なんだから、父親としてわが子に、打ち明けた話はしておかなければなるまい。いいかね。どっちみち死刑を逃れようもないお前さんに、こう言っけかせたって、天国へ行きたがっているお前さんを、ひきとめることはできっこないにしてもだ。とにかく、あのユダヤ女マリアにお前を生ませた御当人は、ほかならぬこのローマ男、ユダヤ進駐軍兵士のおれさまなんだからな。ローマ帝国の權威をないがしろにする、極悪犯罪とかかわりあいができるのは、まっぴら御免だから、これから先もおれは誰一人にも、こんな秘密は打ち明けないつもりだ。だが、お前にだけは、告白しておきたかったんだ。お前の父親は、あのいくじなしの大工ヨゼフでもないし、まして神でなんかあるはずがない。これだけは、よくよくおぼえておくがいい……」

だが、おれは叫び出しもしなかったし、ささやきかけもしなかった。

なぜだろうか？ 言いようもない深い暗いおそれのために、だまっていたのだろうか。それとも、ありきたりの恥しき、てれくさき、ひっこみ思案のせいで、貝のように口をつぐんでいたのだろうか。

おれはただ、捕虜や奴隷の労働能力を検査する監視役のようにして、あの男の通過を見送っていたのだ。おれはかなりくわしく、見おとしのないように、あの男の背にした重い重い荷物と、その重さに耐えて一歩々々足をはこんでいるあの男の体力を観察していた。

あらゆるものすさまじい戦場の、あらゆる種類の討ちあい、殺しあいにあたって、おれは自分の体力と敵の体力とをくらべあってきたものだ。そうして、何度もいいよもうだめだと感じながら、ようやくのことで、どうやらおれの体力を、生きられるだけの強さで保ってきたのだ。

長い兵士生活のあいだに、おれはひとりで、人間の体力を観察したり測定できるハカリのよくな才能を身につけてしまっている。

だから、あるとき、ゴルゴタの丘に向って苦しい歩みをつづけているお前の足どりが、もはや人間の体力の限界にきていることを見ぬくのは、わけのないことであつた。もう少し、あと少しでもあの坂路が長かつたら、お前は、とてもあの丘の頂上までたどりつけないで、泡をふいて倒れてしまい、そして意識不明になるか、それとも内臓が破裂するかして、名誉（まったくばかばかしい名誉であるが）ある十字架をかつぎあげるところか、その十字架に釘づけにされる前に、あつさりこの世におさらばするところだつたのだ。

おれがもし、意地のわるいユダヤ神学の博士だつたなら、お前は死体となつてから十字架に釘づけにされ、生物でなくなつてから死刑にされたのにすぎないのだから、お前の十字架なんぞ、何の価値もないのだぞと宣伝してやりたいところなんだが。

だがしかし、おれにとって、ある程度、お前の感じている苦痛は、おれ自身の苦痛として感じられていたことはまちがいが無いのだから、おれは一瞬だつて、お前に対して意地わるくなろうはずがなかったのだ。

お前は、たしかにあの途中で、チラリとおれの方を見やったな。おれが、他の連中とはちがった眼のひかり、眼のくもりでお前を見つめていたことを、お前のすばやい眼が、つかまえないはずはなかったらうからな。

いや、そうではなかったかも知れない。お前はただ、救われざる人に、目ざめることの無い人に、お前のここを何一つ推察するすべも知らない群集の一人として両側にビッシリ詰めかけた人の群れを眺めまわすついでに、その多数の中の一箇たるおれを見たのかも知れんな。

お前がそのように、数学上の一点のようにして、おれを見たとしても、またはぜんぜん見てくれもしなかったにしても、それがどうだと言うのか。

お前にとって、このおれは、肉体的にも精神的にも、てんで無関係な者だとして考えられていたからには、その無関係な者が見られようが見られまいが、別だん気にとめる必要もないことだったろうし、それに一人の男、死刑場へ駆りたてられ行く犯罪者の眼、しかもたった一人の男の、二つしかない眼球におれの姿がうつらなかつたからと言って文句のつけようもないではないか。

第一、神ならともかく、人間である以上、その人間の中の一人が、人間すべての者を見つくし見おわるなどという事態が起りうるわけがないではないか。

（大きな声では言えないが、このおれとお前との肉親関係だって、世界領土のすべてを見そなわす大ローマ皇帝陛下のあのするどい大きな両眼でさえ見ていられはしないのだからな。シッ）

お前の腰は、今にも砕けそうだった。いや、くだけたのだ。骨ばったお前の細い脚が二つ折れになり、お前は膝を地につけたのだ。思い切った荒野の放浪や、村から村へのたえまない旅のため、お前の脚は人なみはずれて強健になっていたのだが、太く重い十字架の材木にくらべ、今にも折れそうなほど弱々しく見えていたのだった。

とても耐え切れるはずのない重労働においつかわれて、あえぎくるしんでいる捕虜や奴隷の仲間の中で、立派に耐えしので、なおもその重労働をつづけて行く奴が、おれは好きだ。そんな奴らこそ、役に立つ男だからだ。あっぱれな奴、可愛い奴と想いながらも、なんとなくそいつが憎らしくなってくるほど、おれとそいつは、そのことのおかげで結びつけられるのだからな。

イバラの冠に傷つけられたお前の頭部からは、埃にまみれた血が流れおち、貧血のせいで流れ出す冷い汗が蒼白い顔一面をおおっていた。お前のように陽やけした顔の男が、蒼白い顔の男となっていたのだから、それだけでもう、お前の耐えている苦痛の量が、すぐにわかってしまうのだ。

お前の耳には、お前をとりかこむユダヤ人たちの罵りの声が押しよせていたはずだ。気の遠くなりそうな苦痛のおかげで、お前の耳にはそれが遠い遠い潮騒のようにしかききとれなかったではあろうが、民衆の悪意が大波のように大渦のように、うねりにうねって自分につかみかかっていることは、よく承知していたはずだ。

なぜ、その時、お前の「神」はお前を救おうとしなかったのか。それは、お前の「神」が、た

まらないほどの重労働の苦痛に打ちひしがれながら、なおも耐え忍んでいるお前をよくよく眺め、あっぱれな奴、可愛い奴と想いながらも、なんとなしお前を憎らしくなってくるほど、そのことのおかげで、お前とむすびつけられていたからなのだ。

それほどまでに、お前と「神」とは固くむすびつけられ、離れがなくなっていたので、お前の「神」はとうとう、お前が十字架の上でハリツケになり、長い長い苦痛のあとで息絶えるまで、お前を手ばなそうとはしなかったのだ。だから、おれに言わせれば、お前をゴルゴタの丘にまで追いあげ、お前の手足を釘づけにしたのは、ローマの皇帝カイザラでもなく、総督ピラトでもなく、パリサイ人びとでもサドカイ人でもなくして、お前の「神」そのものだったのだ。そして、お前の弟子たちと言わせれば、その「神」こそお前の父親だったことになるわけだ。

「神」とよばれるお前の「父親」が、お前を苦痛と死と栄光の高みへ連れ去るのを、もう一人の父親たるおれは、うつろに、うろたえながら、また他人ひとごとの如くに見守っていたのだった。

お前の信じ切っている「父親」、そのひと（神なら神でいいさ）のためにすべてを捧げようとしていたその「父親」が片方にあり、もう片方にはお前が知りやしない、お前が一言も話をかわしたこともない無縁のローマ老兵士、しかも肉のつながりのあるらしき妙な父親がいる。だとすれば、この二人の父親の勝負は、はじめからきまりきっていたのだ。

お前の「神」はお前にとって、父親であるよりむしろ「主」「主人」だったのだ。おれがお前にとって「主」「主人」でなどありうるはずはないのだし、今となってはお前以下の下賤の者、

お前の「父親」に背いた、お前の「父親」から罰せられる、ある別箇の父親なのだからな。

おれの故郷にくらべ、この土地の夜の冷えこみはひどい。昼間のあかるい太陽と、はげしい暑熱の点では、さしてちがいが無いが、星のかがやく夜になってからの温度の変化は、この土地では、きわだっている。そんな春の一夜のことだった。

おれは、お前の母親マリアに遭ったのだ。お前の年齢とちょうど同じ年の数を重ねた、むかしの話だ。

おれはもとより、どこの土地へ侵入し、どこの村や町を占領しても、女なしではすまされない男だった。それに、どんな異族の女でも、女には好かれるという自信もあった。ここらへんには、マリアという名の女が、あたり一面にころがっているのだから、どんなマリアだって女なら一向にかまったことではなかったのだ。

「聖なる母」などというものには、どこへ行ってもお目にかかったことはなかったし、ことさらにこのきたならしい、産物に不足した、みじめったらしい土地に来て、まともに相手にできる女など、見つけ出すことはできないと、最初っからたかをくくっていたのだ。

進駐してきた金まわりの良きそうな外国兵に、コビを売る女はどこにでもいる。そんなのは、あきあきしているから、できることなら娘、生娘、処女、いやそうではなくても売りたいがっていない女を手に入れたと思うのがあたりまえなのだ。別だん、苦心して探し求める必要はなかったのだ。酔ったあげくに、ぶらぶら歩きして、行きあたりばったり、出つくわした女を闇の中

で抱きすくめてしまえば、それですむことだった。

これほどまでに女好き、女あさりの名人であるおれの種子を宿して生まれてきたお前さんが、どうして女を抱きたがらぬ聖者様になられたのか。たぶん、君は男性として異常体質に生れついたんだと、おれは判断している。そして、あんたのその体質と性質は、おそらく、あのマリアの体質と性質をそっくりそのまま受けついだのにちがいないのだ。

おれの配属された重装備部隊の隊長に、ひどく哲学者ぶる男がいたのだ。その男からおれは、学術都市ローマのもっとも得意とする論理学という奴を教えられたのだ。だからおれは、男女関係についても、宗教問題や政治さわぎについても、論理的に解釈できる力をたくわえているつもりなんだ。

この論理的な考え方によればだ。あのマリアは、たいへん淋しい境遇におかれている、とびぬけておとなしい女性だった。あの女は、おどろくべきことには、男ずきでさえなかったのかも知れないのだ。

すべての女は男好きである。したがって一人々々の女はめいめいに男好きでなければならぬ。それ故に、もしも男好きでない女が存在するとすれば、それは女ではない。

しかしながら、あのマリアがはたして、女であったか、それとも女でなかったかと問われたとするならば、やはりあの女は「女」であったと、おれは即座にこたえるであろう。だが、そう答えたあとで、おれはたちまち矛盾と混迷におち入る。